

白井喬二と「大衆文学」形成期

——石井鶴三宛中里介山書簡の位置

平 浩 一（国士舘大学文学部）

本稿は、信州大学附属図書館蔵「石井鶴三関連資料」から発見された、三通の石井鶴三宛中里介山書簡を、既存の研究においてやや

等閑視されてきた、白井喬二の動向のなかに据え直すものである。

それによって、「大衆文学」黎明期を素描・概観し、その〈ジャンル形成〉の一端を追っていく。さらにそこから、今後の「大衆文学」研究の課題を見出し、特に、戦時下との関連で考察する道筋を探っていききたい。

一、白井喬二と「無評論時代」——不言実行主義を語る姿勢

一九二〇年代の白井喬二は、多岐にわたる場面で活動していった。その「功績」について、尾崎秀樹は以下のように述べている。

白井喬二が大衆文学史の上で果たした大きな功績は三つある。一つは大衆作家の自己主張の場として二十一日会を結成し、雑誌『大衆文芸』を創刊したこと。次に平凡社より『現代大衆文学全集』全五〇巻を刊行するために率先協力し、大衆文学作家の社会的地位の向上、一般の大衆文学認識を是正することに尽したこと、そして最後に、実作を通して新しい大衆文学の典型像をおしだしたことであろう。（「白井喬二論」『大衆文学

論』一九六五・六、勁草書房）

このように、一九二〇年代の白井は作家としてのみならず、「ジャーナリスト、編集者、広告家」*₁としても大きく活躍していった。だが、唯一、評論活動だけは異なった姿勢をとっていたと見られている。すなわち、「十年批評するなかれ」の沈黙主義にとじこもり、「十年計画で順次に歩を進めてゆきたい」という願いのもと、「一種の休戦協定の申込み」を行ったというのである*₂。

実際に、一九二五年頃の白井の発言を見ると、広く知られる「十年批評をする勿れ」という言葉をはじめ、「そもそも大衆文芸論を一体誰に読ませやうとするのであろうか」、「いはゆる「不言実行主義」が一番いゝ」、「常に無評論主義を標榜してゐる者故、あまりに多くいふを好まぬ」*₃などと繰り返している。

白井のこうした姿勢について、尾崎秀樹は「今日ふりかえってみて、その白井の態度が、大衆文学理論の（大衆文学側からの）興隆にマイナスに働いたことはあらそえない」とした。すなわち、「大衆文学の理論づくりをそれだけあとへくりのべ」、「白井喬二の意向とは別個に、それまで存在した大衆文学の理論を蔑視する風潮を助ける一面がありはしなかつたか」という問題を提起したのだ。尾崎はここに、「大衆文学」の批評・研究が過疎化した要因のひとつを見出

した上で、自ら「無評論時代の終焉」を宣言していく*。

だが、『大衆文藝』刊行（一九二六・一）に先駆けて発表された『大衆文藝』宣言文を見ると、白井のまた違った側面が見えてくる。彼は、『大衆文藝』を中心とする我々の仕事は、決して作品発表のみに止まらず、大衆に対する種々相の研究、批判、亦折に臨んで同人合議の上、いろくの実施行動を執る、「それ等は純真の批判であり、亦純正の行動であり度い」と明言していたのである。

やや先取りしていえば、白井は「十年批評をする勿れ」「無評論主義」「不言実行主義」を掲げつつも、同時に、そうした言を「批評」や「評論」のなかで述べていたのであった。それについては、後年白井自身が「十年批評をする勿れと云っておりながら、自分の方からはいくつもの評論を発表した」、「勿れ主義を逸脱して評論にまで手をさしのべるようになってしまった」、「ぼくは作品が忙しいにもかかわらずいろいろの評論を片っ方で発表している」などと述懐している*。

例えば、『大衆文藝』創刊と同時に発表された、広く知られる「大衆作寸言」（『獵人』一九二六・一）は、以下のように書きはじめられている。

（一）私は最初物を書き出した時は口癖のやうに『娯楽雑誌愛すべし』といつてゐた。

（二）今は『十年批評をする勿れ』といつてゐる。

（三）前者の時代よりも後者の時代の方が、この仕事の六ヶ敷いことに気が付いた結果である事は言ふまでも無い。

（四）すでにさういふモットーを掲げてゐる以上は不言実行を標榜してゐるのである。それゆゑ、各方面の新聞雑誌から

評論感想を依頼受けても私は未だ一回も果さないでゐる。

だが、筆が進むにつれ、論旨は以下のように展開していく。

（十）大衆作家となるには本質的にさうでなければならぬ。あらゆる芸術がさうであるよりも、或ひはもつと本質的でなくてはならぬかも知れない。

（二十九）紅葉時代に少くとも文芸を持つてゐた民衆が、あんまり文芸が鋭角的に発達したのですつかり奪はれてしまつた。（中略）そしてそれが所謂道程的に漸新的に、同等価値を生じて来るまでわれくの仕事は動いて止まないのだ。これも既に默契は成り立つてゐるつもりだ。

（三十二）大衆作家は一種の政治家であるかも知れない、施政方針をきめて行かなければならぬ、すぐ一本調子に目的に飛び込めるなら何も苦労はしない。そこに政事当路者としての苦心がある……（後略）

このように、初期の代表的な評論「大衆作寸言」においても、白井は「十年批評をする勿れ」「不言実行」「默契」を掲げつつ、同時に、「大衆作家」の「本質」を規定し、その「歴史」をたどり、「施政方針をきめて行かなければならぬ」と、未来の展望までその視野を拡大させている。このような形で、自らの「大衆文学」観を提示していく白井の姿勢は、「大衆作寸言」にとどまらず、「大衆文芸と現実暴露の歡喜」（『中央公論』一九二六・七）にせよ、「分離時代を高唱す」

『読売新聞』一九二八・二一・二二（一七）にせよ、この頃、非常に多く見られるものであった。「無評論主義」「不言実行主義」のなかで形づくられた白井の「大衆文学」観は、その後、直木三十五や中谷博らに引き継がれ、より強固なものになっていく。

それでは、白井が主張した「大衆文学」観とは具体的にどのようなものであり、彼の「大衆文学」論は、具体的にどのようなように展開していったのか。それは、後ほど注目するとして、ここで一旦、中里介山の存在に目を向けてみたい。

二、中里介山と「墨画小品展」——三通の石井鶴三宛書簡

一九三〇年代、突如、「大衆文学」の理論の旗手として登場したが、ドイツ文学者の中谷博であった。「白井喬二への傾倒」の強い中谷であったが⁶、彼が、白井と並立させる形で賞揚した作家が、中里介山であった。特に、机龍之助について「ラスコリニコフの斧として、剣が使用される」などと指摘したことは広く知られる⁷。さらに中谷は、「大衆文学発生史論」(『大衆文藝』一九三九・七〜一〇)において、「大正二年に書かれ始めてある中里介山氏の『大菩薩峠』によって「大衆文学発生」の端緒がひらかれた」等、「大菩薩峠」の『都新聞』連載開始の一九一三年を、「大衆文学」誕生の年と見なしていた。

しかし、周知の通り、中里介山自身は「大衆文学」という呼称に強い拒否の姿勢を示し、自らがそこに区分されることを徹底的に忌避した。最もそれが直截にあらわれているのが、「余は大衆作家にあらず」(『隣人之友』一九三四・一一)である。

同論で介山は、熱心な仏教徒という立場から、もとは仏教用語で

あった「大衆」(「大衆文学」という言葉に、強い違和を示している。しかし、ここで注目しておきたいのは、介山が「この十年以内に多分誰れかによつて称へ出された」、「彼等文筆者流のグループの間から生み出された」、「ある一派の文士連が、さういふ名と分類を都合上こしらへて、それを圧迫的に世間に受取らせやうとする」などと、「大衆文学」という「命名」と「分類」について、具体的な名こそ挙げていないものの、特定の作家を明確に念頭に置きながら違和を表明し、批判をしたことである。

こうした介山の「大衆文学」に対する姿勢を再確認しつつ、ここで、信州大学附属図書館蔵「石井鶴三関連資料」から発見された、三通の石井鶴三宛書簡に目を向けてみたい。時代はややさかのぼり、いずれも一九二五年の「墨画小品展」をめぐる書簡である。

少し背景を整理しておく、「墨画小品展」とは、一九二五年一月一日から一〇日間、京橋日米ビル二階にて開催された展覧会である。すでに美術家として名を馳せていた木村莊八・石井鶴三・小杉未醒による、白井喬二「富士に立つ影」・中里介山「大菩薩峠」・講談「清水次郎長」の挿絵を展示するという、版画家の西田武雄による企画であった⁸。この展覧会は、結果的に好評を得る形で終わるが、水面下で様々な騒動が巻き起こっていた。その中心人物が、中里介山であった。当時、石井鶴三は「大菩薩峠」の挿絵を担当し⁹、好評を博していた。その石井鶴三に宛てた、「墨画小品展」に関する中里介山の書簡を三通、ここで引いてみたい。

1、石井鶴三宛中里介山書簡(仮番号「高1—23a」)

お手紙拝見原稿の方はつとめてお間に合はせま

せう。

画会の件も至極おもしろい企と存じまた有益なる刺戟ともなりませうが、小生として一つ打ち明けて申せば不快な事は報知の白井君といふ

人は小生の模倣ばかりやりたがる人で、それをまた文壇の或種の尻押しがわざと小生と比較しどちらがどうかうのかうのと弥次をやつてゐる心事が日頃浅ましいと思つてゐる処へ、二つだけ並べて

新らしい試みの画会を開くといふその事が「小生 ミセケチ」には不快なのです。ミセケチ」イヤに思ひます。

右と同列でなく、他に□□が加はるか或は貴下単独でおやりになるならば少しも異議はございません、木村莊八氏に対しても敬意を持つて居りますが、たゞ白井といふ人及びその背後の弥次が大嫌ひなのです。この点を一つ御考慮願ひたいと存じます

先は取り敢へず早々

不備

大正十四年

中里生

石井画伯 御中

2、石井鶴三宛中里介山書簡（仮番号「高1—13」）

拝啓

画会の件アナタノ方はトニカク

私の方は大不賛成です。

西田といふ男アレは純然たる書画屋で営業本位で利用するだけのものです。

一度会つて見ましたが問題になりません。—且、約束に違つたやり方をしてゐます。

トニカク、おやりなさるならおやりなさい。

小生はドコまでも不賛成で、かりそめにも自己の作物を営業と悪意とに利用されたことを覚えてゐます。

また小杉氏が講談物などを平気で

執筆する良心の欠けたことをな「不明一字 ミセケチ」げき貴下や木村氏の如き人が、こんな種類の展覽を甘んずるのを甚だ遺憾と致します。先は

十二月十三日

中里生

石井鶴三様

3、石井鶴三宛中里介山書簡（仮番号「高1—15」）

今日山より帰来 お手紙拝見。

もう一応小生の意志を申上げて置きます。

今回の小生の所見は画家としては貴下の人格

を信じて作物としては或物との並列を嫌ったので
す。

現時の文壇のある空気には小生の作物を誣いん

として一種のたくみを持つ者が多い。小生は彼等の

卑劣を「悪 ミセケチ」にくんでゐる。―これは決してひがみ、

ではない。

小杉氏が講談物を執筆する動機は知らないが、

若し同君が「西遊記」の如きものを執筆して個々の

人物を表現させたら非常に面白からうと思ふ。

それでもあつたら小生も首肯したかも知れない。

バクチ打ちだか侠客だかさういふものを描いて何の

抱負があるのですか。オレほどの大家が斯うい

ものを執筆して見せるといふフザけた気持なら

論外です。

兎に角小生は作物を他の目的の為に利用されるこ

とを絶対に不可とします。

今回の事は貴下の人格を信じたもので貴下の

為ならば甘んじて縁の下の力持でも何でもつとめ

やうと思つた精神が西田にわからなかつたので

す。

今後はどうか此の点を御諒察下さい。小生は

読物とする以「不明一字 ミセケチ」外には演劇、映画、その他す

べての複製を謝絶してゐます。

西田には何を云つてもわかるまいから貴下にだけ

これを申上げて置きます。先は

十二月十八日

中里生

石井様 侍史

この三通の書簡は、介山の「墨画小品展」に対する心境が、「画会の件も至極おもしろい企と存じまた有益なる刺戟ともなりませう」

(九月三〇日)という感想から、「画会の件アナタノ方はトニカク私

の方は大不賛成です」、「トニカク、おやりなさるならおやりなさい。

小生はドコまでも不賛成で、かりそめにも自己の作物を営業と悪意

とに利用されたことを覚えてゐます」(二月三日)という形で、

劇的な変化を見せているという点が興味深い。また、「小生は読物と

する以外には演劇、映画、その他すべての複製を謝絶してゐます」

(二月一八日)という文面から、沢田正二郎らをめぐる演劇化の

騒動や¹⁰、後のいわゆる「挿絵事件」との関連も想起させる。

その意味でも、これら三通の書簡は貴重な資料といえようが、こ

こで注目したいのは、介山が「墨画小品展」に違和を示している、そ

の具体的な理由である。介山は書簡内で、「報知の白井君といふ人は

小生の模倣ばかりやりたがる人で、それをまた文壇の或種の尻押し

がわざと小生と比較しどちらがどうかうのかうのと弥次をやつてゐる心

事が日頃浅ましいと思つてゐる」(九月三〇日)、「小杉氏が講談物な

どを平気で執筆する良心の欠けたことをなげき貴下や木村氏の如き

人が、こんな種類の展覧を甘んずるのを甚だ遺憾と致します」(二二

月一三日)、「小杉氏が講談物を執筆する動機は知らないが」、「バクチ

打ちだか侠客だかさういふものを描いて何の抱負があるのですか」

(二月一八日)という形で、「大不賛成」の具体的な理由を述べて

いる。

すなわち、少なくとも一九二五年の段階では、中里介山は、石井鶴三はもとより、木村莊八・小杉未醒らの挿絵に強い「敬意」を抱きつつも^{*11}、白井喬二や「講談物」と「並べ」られることを「イヤに思」い、その背景にある「文壇のある空気」こそが「墨画小品展」出展に反対する理由だと、はっきり吐露しているのである。

書簡から見えるこうした事実をふまえるならば、「大菩薩峠」演劇化をめぐる種々の騒動や、一九三四年の「挿絵事件」には、「大衆文学」や「講談物」といった〈ジャンル区分〉も、あるいは、そうした〈区分・分類〉を助長する「文壇」の存在も、深くかかわっていたことが、あらためて浮かび上がってくる。

しかし、本稿は演劇・挿絵の問題を主眼とするものではない。そこで、ここからは、「墨画小品展」が開催された一九二五年という時期と、「大衆文学」をめぐる動向に、再び焦点を当ててみたい。

三、「大菩薩峠」と「富士に立つ影」——並列される小説

一九一三（大正二）年九月二日より、「介山生」の署名のもと『都新聞』紙上に連載された「大菩薩峠」であったが、介山は一九一九年に退社、同紙での連載も一旦終了する。その間、介山は自費出版にて和装本を刊行するも（玉流堂）、本格的な単行本は、春秋社からの和装本・洋装本の刊行であり、一九二三年の縮刷本刊行であった^{*12}。泉鏡花のように、『都新聞』連載時から「大菩薩峠」に注目していた作家もいたが、それもごくわずかであり、単行本刊行によって、徐々に作品が注目されていく。谷崎潤一郎「饒舌録」（『改造』一九二七・二（一一））等に見られるように、「大菩薩峠」が本格的に評価されはじめたのは、さらに後、一九二五年一月六日より『東京日日新聞』大阪毎日新聞』夕刊に再連載されはじめてからのことであつた。

関東大震災後、関西資本を中心に新聞の販売部数は大幅に増加し、熾烈な部数拡大の競争が行われた。そのなかで、各紙は販売戦略として「新講談」の流れを汲む小説を、夕刊に連載しはじめる。そのひとつが「大菩薩峠」になるのだが、同作とともに、大きな話題となった連載小説が、白井喬二「富士に立つ影」であった^{*13}。「大菩薩峠」再連載直前の段階で（連載五日前）、すでに、次のような評が見られる。

関東大震災後、関西資本を中心に新聞の販売部数は大幅に増加し、熾烈な部数拡大の競争が行われた。そのなかで、各紙は販売戦略として「新講談」の流れを汲む小説を、夕刊に連載しはじめる。そのひとつが「大菩薩峠」になるのだが、同作とともに、大きな話題となった連載小説が、白井喬二「富士に立つ影」であった^{*13}。「大菩薩峠」再連載直前の段階で（連載五日前）、すでに、次のような評が見られる。

白井喬二氏の大作「不二に立つ影」に対して、中里介山氏が、新たに、「大菩薩峠」を続けるのは、読み物として興味ある対照でなければならぬ。自分は平生二氏の作物の特性について、いつも面白い反蹠的なもの、あるのを思ふのである。（中略）読み物界の稀有の二才人が、二つの大きな新聞によつて対立し、お互の特能を發揮することに対して、私はそゞる興味の微笑を禁じ得ないものである。（千葉亀雄「文芸時評」『新小説』一九二五・一）

また、連載開始直後（半月後）も、次のような感想が述べられている。

日々新聞（東京日日新聞——引用者注）に、この一月から中里介山の「大菩薩峠」が出たために、購読を止めやうと思つてゐたのを見合せたとか、新に日々新聞の読者になつたとかいふ人の話もききました。それから、白井喬二其他の人の一種の読

物が、読書界に、大変人気を博してゐると云ふことは、専らの評判です。(平林初之輔「今の小説について」『早稲田大学新聞』一九二五・一・二二)

このように、中里介山の「大菩薩峠」は、実に一〇年以上前から『都新聞』に連載されていたにもかかわらず、再連載時によく本格的に注目され、ほぼ同時に、同じ新聞メディアで連載開始されたため、白井喬二、あるいは「富士に立つ影」と並べて眺められるようになっていった^{*14}。だが、事態はそこに留まらなかった。

「大菩薩峠」が『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に再連載されはじめたのは、「富士に立つ影」『報知新聞』連載開始の半年後であった。発行部数も非常に僅少であった『都新聞』連載時、「大菩薩峠」はさほど注目されなかったこと、あるいは白井喬二が「富士に立つ影」以前から、『サンデー毎日』の「新撰組」(一九二四・五―一九二五・六)で、すでに注目を浴びていたことなどが重なって、ここに転倒した認識も発生していったのだ。それは、「大菩薩峠」が「富士に立つ影」に追隨して執筆・連載された、という認識である。その時の状況について、白井喬二は後年、次のように語っている。

奇縁というか、河出の『日本国民文学全集』の追加別巻として(中略)介山の『大菩薩峠』と、『富士に立つ影』の二作が並んで出版された。もちろん介山はよく以前の作家であるが、昭和になって『東京日日』に再出発したのはぼくの『富士に立つ影』の対抗馬として、登場したという評論家の説は正しいだろう。ぼくも作家としての感覚で介山再登場のときそう思った。(『さらば富士に立つ影——白井喬二自伝』一九八三・四、六)

興出版)

実際に、先の千葉亀雄の評でも、「白井喬二氏の大作「不二^{フタ}に立つ影」に対して、中里介山氏が……」と評されている。こうした経緯があったからこそ、同年の「墨画小品展」において、中里介山は「報知の白井君といふ人は小生の模倣ばかりやりたがる人で、それをまた文壇の或種の尻押しがわざと小生と比較しどちらがどうかのかわりか」と弥次をやつてゐる心事が日頃浅ましい、「二つだけ並べて新らしい試みの画会を開くといふその事がイヤに思ひます」、「並列を嫌つた」、「白井といふ人及びその背後の弥次が大嫌ひなのです」などと述べなければならなかったであろう。

このように、「墨画小品展」をめぐる中里介山の姿勢は、「大菩薩峠」再連載開始時の背景とまなざしを示すものであった。それにとどまらず、この介山の姿勢は、一九二五年という「大衆文学」発生とされる時期の重要性も示していく。

四、「大衆文学」をめぐる綱引き——一九二五年という転換期

「大菩薩峠」が『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』夕刊で再連載開始され、さらに「墨画小品展」が開催された一九二五年、特にその後半は、白井喬二が精力的な活動を展開していた時期であった。

まず、一〇月に、それまで交流のあったメンバーと「二十一日会」を結成、翌年一月には、同メンバーによって、報知新聞出版部から『大衆文藝』を刊行する。その「挨拶文」とされる『大衆文藝』宣言文^{*15}も、すでに二五年一〇月、白井によって執筆・印刷され、広く配布されていた^{*16}。また、第一節で注目した、初期の代表的な評論

「大衆作寸言」も、この年に執筆されたものであった（掲載は翌年一月『獵人』）。

こうした旺盛な活動を、白井は「新撰組」（『サンデー毎日』・「富士に立つ影」（『報知新聞』）連載と同時期に行っていたのである。例えばセシル・サカイは、これらの白井の動向等に注目しながら、「一九二五年頃になつてはじめて、大衆文学は新しい文芸思潮として体裁を整えた」、「完全なかたちでの大衆文学の出現を一九二五年頃とする場合には、べつだん矛盾はないだろうと思われる」と指摘している^{*16}。

このように、一九二五年は、白井が「大衆文学」の流布と作家の結束を強めるため、東奔西走していた時期であった。さらに、へ円本ブームの気運に乗って、二年後に刊行され、「大衆文学」の認知を決定的ならしめた『現代大衆文学全集』（一九二七・五配本開始）にも、白井は平凡社社長・下中弥三郎とともに、重要な役割を果たしていく。特に注目されるのが、自ら車を手配して書店でPR活動を行うとともに、全集収録の他の作家の結束に、強く配慮していったことである。白井自身の述懐によると、第一回配本が「富士に立つ影」三巻に決定しかけていたのを、他の作家を慮って「新撰組」一冊に差し替え^{*17}、また、自分に多く支払うという印税を、全作家均一にするようお願いしたという^{*18}。この『現代大衆文学全集』に収録された作家は、当然、「二十一日会」のメンバーが中心であり、中里介山の作品は一切収録されていない^{*19}。

こうした白井の「ジャーナリスト、編集者、広告家」としての活動が、「大衆文学」の大人気を生んでいったことは確かであろう。それだけ、一九二五年という年は「大衆文学」にとって重要な年であり、また、「二十一日会」の結束の強さがその背後にあったことが、

再度確認できる。「二十一日会」のメンバーの一人であった直木三十三（のち三十五）は、一九二三年の段階で、中里介山と白井喬二を比較しながら、次のように語っていた。

通俗小説——とま云つてをくが神変異越草紙の作者白井喬二氏を中里介山以上に推奨するといふことを云ひたい。介山は変に御高く止つて澤正をいぢめたり、己れの小説は日本に未だ三十年早いとか、本当の意味は誰にも判るまいとか嫌に高慢ちきだが人の称めぬ内こそ称めもしたれ、今日になつてはあべこべに喬二を挙げて介山を下にしたい。喬二は全然興味本位で介山のやうな御談義染めたものが無いだけ優れてもゐる！文章も枯れてゐる。そして妙な智識に広く布地の怪奇な点に於て誰の追従も許さぬ所がある。（六月文壇は如斯（三））『時事新報』一九二三・六・二）

直木らしい文章といえはそれまでだが、彼は、中里介山を痛烈に攻撃するとともに、白井喬二を絶賛していったのである。また、同じく「二十一日会」のメンバーであった国枝史郎は、一九二五年、次のように白井喬二を評している。

文字に対する異常感覚、是を唯一の売物として大衆文壇へ飛び出して来たのが他ならぬ白井喬二氏である。もう彼は五六年にもなるが、容易に人気は墜ちさうもない。（中略）彼は一個の魔術師である。いよく、以て面白い。（『大衆文壇鳥瞰（一）』『読売新聞』一九二五・四・一九）

ここで興味深いのは、国枝史郎は、さすがに、直木のような介山批判は展開しないものの、白井を絶賛するとともに、すぐさま「中里介山氏の『大菩薩峠』は大衆文壇の聖典である。畏れみ尊み批評を避けなければならない」と述べることで、介山への直接的な言及を、うまく「避け」ていることだ（『大衆文壇鳥瞰（二）』『読売新聞』一九二五・四・二一）。

一九二五年一二月の「墨画小品展」の背景には、こうした中里介山と「二十一日会」との「大衆文学」という〈ジャンル形成〉をめぐる、綱引きのような状況があった。さらにこの年は、「大衆文学」のみならず、挿絵画家たちも大きな転機を迎えていた。

匠秀夫が指摘するように^{*20}、「挿絵の近代性獲得」に大きな役割を果たしたのは、石井鶴三であった。上司小剣「東京」（『東京朝日新聞』一九二一・二・二一〜七・九）の挿絵提供が「先駆」となり、一九二五年の「大菩薩峠」再連載の挿絵が「決定打」となって、「近代的な芸術性」が確立され、多くの日本画家・洋画家が、挿絵界で活躍していくことになる^{*21}。だが、見逃してはならないのは、「東京」と「大菩薩峠」両作の間に、挿絵史において重要な作品が連載開始されたことだ。それこそが、白井喬二「富士に立つ影」であった。

紅野謙介が指摘するように、関東大震災後の印刷技術の進展等によって、新聞メディアも「グラフィズムの時代」を迎えていく^{*22}。そんななかで連載がはじまった「富士に立つ影」では、挿絵も画期的な方法が用いられた。木村莊八・河野通勢・山本鼎・川端龍子の四名が、各六・七回ずつ、リレー方式に、挿絵を担当したのである^{*23}。作者の白井喬二自身も、挿絵の重要性を強く認識しており、挿絵画家たちと、綿密な打ち合わせや深い交流を持ったことを述懐している^{*24}。

このようにして誕生した「富士に立つ影」の挿絵は、企画通り大きな評判となり、匠秀夫も「鶴三の開いた突破口をさらに切り開いた」と評している。その翌年、石井鶴三が挿絵を担当する「大菩薩峠」が再連載されたのだ^{*25}。

すなわち、中里介山本人の意図しない所で、「挿絵の近代性」という側面でも、「富士に立つ影」と「大菩薩峠」は、並べて眺められる存在、あるいは（結果的に）「大菩薩峠」が追随する形になっていったのである。あらためて確認しておく、「墨画小品展」が開催されたのは、この年であった。

こうして見ていくと、本稿で紹介した「墨画小品展」をめぐる中里介山の三通の書簡は、介山個人の気質や性格だけに還元できない、一九二五年の「大衆文学」の〈ジャンル形成〉をめぐる、様々な要素が集約されたものであったことが、あらためて浮かび上がってくる。そして、これらの要素は、その後の「大衆文学」の行く末にも深く関わっていく。

そこで、本稿の最後に、第一節で触れた白井の「大衆文学」観について、その後の展開を確認し、いまだ開拓の余地を多く残す「大衆文学」研究の展望と課題とを、戦時下にまで視野を拡大しながら探っていききたい。

五、白井喬二の「大衆文学」論の展開

——ジャンル規定がもたらしたもの

第一節で見たように、白井喬二は「大衆文学」に対する「批評」「評論」の否定を、「批評」「評論」のなかで展開し、「不言実行」を言明しながら、独自の「大衆文学」論を展開していった。この白井の

姿勢は、「默契」という言葉に示されるように^{*26}、却ってそれだけ強い形で、潜在的に「大衆文学」の〈ジャンル形成〉の強化をもたらしていく。

例えば、「大衆作寸言」に続く代表的な論「大衆文芸と現実暴露の歡喜」(『中央公論』一九二六・七)において^{*27}、白井は「大衆文芸とは計らずしていゝ名前が附いてしまつた」、「大衆文芸は幅広く、大きく、健全に、確乎不拔な発達を遂げる」、「殿堂に早く上りたがらぬに、日本が始めて完成した大衆文芸といふ風にならなければならぬい」などと、その〈ジャンル区分〉と〈かくあるべき姿〉にこだわっている。さらに同論で、白井は「大衆文芸」の展望を「五つに分」し、「第一期の雰囲気構成時代を漸く卒業して、これから始めて第二期の大衆文芸醗酵時代に入らうとしてゐる」と、その未来の〈あり方〉をも、細かく規定していった。

興味深いのは、その一年半後、この規定を白井がやや修正し、「第二期」を「大衆文芸醗酵時代」から「分離時代」へと変更していることだ(『分離時代を高唱す』『読売新聞』一九二八・二・一二―一七)。その主張は、「大衆文学である物も、無いものも、一所に大衆文学と仮命して、その雰囲気境に集合逸樂することを許してゐたのだが、分離時代に一步踏み入るゝや否や、それを許さない状態に置かれることを覚悟しなければならぬ」というものであった。つまり、白井はここで、「大衆文学」の〈ジャンル区分〉を、「雰囲気」では「許さない状態」にまで狭めていったのである。

また、同論では「大衆文学」で「ある物」と「無いもの」を選別するため、「七ヶ條の信念」が提示されている。そこでは、「大衆文学とは何ぞや」という根本的な問題に対して、「大衆文学的信念なきものは大衆文学に非ず」という、ほぼトートロジーともいふべき定義

がなされている。そこから、「大衆文学作家は文事のみならず、生活意識の上に於ても同様の自覚を持たねばならぬ」、「大衆文学信念に相応する、確乎たる見解を持たねばならぬと思つてゐる。否、持たねばならぬのではない、当然持つべき筈のものだ」という、抽象的な言葉が繰り返されていく。その論理が行き着く先は、「最平坦線から出発して、一種の実行実施としての文学行為を行つてゆく仕事」、「民衆の中に実行的に存在するところのネオ本格文学境地」という、さらに抽象的な「大衆文学」の定義であつた。

一九三〇年代以降も、白井は「小説と歴史の区別」(『文藝時報』一九三〇・一一・六)等で、より「大衆文学」の「区別」Ⅱ〈ジャンル規定〉にこだわり、その範囲をいつそう狭めていく。ここで見逃してはならないのは、そうした姿勢が、戦時下における白井喬二の動向に、深くつながっていくことである。

一九四一年に発表された、その名も「正道大衆文学観」(『大衆文藝』一九四一・三)において、白井は「大衆文学は大衆に呼びかける文学だが、決して通俗文学では無い」と断言している。さらには、「純文学などは通俗文学である」、「私に云はすれば、文学として今最高の仕事は大衆文学の完成よりほかにはあるまい」と、高らかに述べていく。彼は戦時下、国家体制に「オピニオン・リーダー」として重宝された背景のもと^{*28}、「大衆文学」が「最高」で、「純文学」が「通俗文学」だと、〈ジャンル〉に分けるだけでなく、その〈優劣〉にもこだわり出していくのである。

このようにして、白井は「大衆文学そのものに物狂はしいまでの情熱と信念」、「絶大の愛着と自信」を抱きながら^{*29}「十年批評をする勿れ」無評論主義「不言実行主義」を掲げつつ、トートロジーと抽象化を交え、「大衆文学」の〈ジャンル規定〉を自らの手で推進して

いった。こうした経緯を再確認することは、今後の「大衆文学」研究において、重要な意味をもつと考えられる。

おわりに、戦時下の「大衆文学」研究の課題と展望

——中里介山・白井喬二を軸に

三通の書簡を中心に、本稿でも幾度か触れたように、中里介山が「大衆文学」という〈ジャンル区分〉に批判的であったことは広く知られている。しかし、彼が特に表立ってその批判を行ったのは、主に一九三〇年代以降であった。一九三一年、「大菩薩峠」第三〇巻「畜生谷の巻」(『国民新聞』)から「大衆文学」作家への揶揄を繰り返し、一九三三年に『隣人之友』改巻を刊行してからは、「金茶金十郎」名義で、直木三十五の「武勇伝雑話」などを痛烈に罵倒していた(『武勇伝茶話』『隣人之友』一九三三・三)。

また、介山が、最も明確に「大衆文学」という〈ジャンル区分〉に違和を示した「余は大衆作家にあらず」の発表は、一九三四年一月、「文芸復興」と呼ばれる時代のことである。第二節で見たように、その批判の矛先は、「彼等文筆者流のグループ」、「ある一派の文士連」、「世間を煙に巻いたつもりである文士連」等々、具体的な名前こそ挙げていないものの、明確な対象を念頭に置いたものであった。その背後には、菊池寛や「二十一日会」の存在はもちろん、本稿で見てきたように、「大衆文学」という〈ジャンル規定〉を強めていった白井喬二の存在があったことを見逃してはならないだろう。

こうした中里介山と白井喬二の対照的な立場は、戦時下において、また別の形で表面化していく。白井喬二が、文芸懇話会委員、ペン部隊(陸軍)、日本文芸中央会顧問、大政翼賛会調査委員、日本文学

報国会小説部会幹事長兼常任理事などを歴任し、時局との接近を強めていったのに対し^{*30}、中里介山は、日本文学報国会への加入すら「入る必要を認めない」、「直に辞任の通告をした」と、断固として拒絶した(『文士の報国に就て』『隣人之友』一九四二・一〇)。この対照性は、様々な要素を包含しており、決して単純化・単線化して見ることはできない。しかし、だからこそ、こうした対照的な行く末の背後にあった、一九二五年からの「大衆文学」という〈ジャンル形成〉をめぐる姿勢の相違は、戦時下の問題と連続させる形で、より深く考察されねばならないだろう^{*31}。

中里介山が忌避し続けた「大衆文学」という〈ジャンル規定〉は、今では、ほぼ自明な存在のように〈歴史化〉されている。そうした「大衆文学」への自明視は、そこに区分された個々の作家・作品の差異を覆い隠し、その多様性を隠蔽する結果をもたらしている^{*32}。そうした現状があるからこそ、いま一度、白井喬二を中心に、「大衆文学」という〈ジャンル〉がどのように形成され、どのように定着していったのか、そして、後の時代、特に戦時下において、どのような影響をもたらしていったのか、これからの研究においてより慎重に問われ、探られていくことが強く求められるのである。

注

*1 セシル・サカイ(Cecil Sakai)「大衆文学の歴史」(『日本の大衆文学』朝比奈弘治訳、一九九七・二、平凡社)。

*2 それぞれ、尾崎秀樹「白井喬二論」(前出)、「無評論時代の終焉」(『大衆文学論』前出)。

*3 それぞれ「大衆文学と現実暴露の歓喜」(『中央公論』一九二六・七)、「分離時

代を高唱す(『読売新聞』一九二八・二・二一〜二七)。なお、白井は自らを、現今の意味での「大衆」という言葉の創始者と位置づけ(『大衆作寸言』等)、さらに「大衆文芸」から「大衆文学」への呼称の変化にも深くかかわっていた。本稿では枚挙の閑係上、「大衆文芸」と「大衆文学」の両者を置換可能なものとして扱うが、上記の事項については別稿で詳しく論じたい。

*4 「無評論時代の終焉」(前出)。

*5 『さらば富士に立つ影——白井喬二百伝』(一九八三・四、六興出版)。

*6 尾崎秀樹「中谷博論」(『大衆文学論』前出)。

*7 「大衆文学本質論」(『新文藝思想講座第七巻・第八巻』一九三四・一一、一九三五・一、文藝春秋社)。

*8 その背景・経緯については、松本和也「墨画小品展と「大菩薩峠」挿絵——新出石井鶴三宛中里介山・西田武雄書簡から」(『信州大学附属図書館研究』二〇一四・一)に詳しい。なお、本節で引く三通の書簡についても、同論で詳細な解説がなされているため、本稿では、重複する箇所はなるべく割愛した。

*9 ただし、金森観陽・中村岳陵と交代していた時期もあった。鶴三が挿絵を担当したのは、掲載順に「無明の巻」「他生の巻」「流転の巻」「みちりやの巻」「鈴慕の巻」「Oceanの巻」であり「白骨の巻」は金森観陽、「めいろの巻」は中村岳陵が担当した。渡辺圭二「『大菩薩峠』の挿絵」(『国文学解釈と鑑賞』別冊『一九九四・一』)等参照。

*10 紅野謙介「中里介山『大菩薩峠』とその演劇化をめぐって——一九二、三〇年代における「文学場」の変容」(『国語と国文学』二〇一三・一一)参照。

*11 中里介山の石井鶴三に対する、この頃の強い「敬意」を示すものとして、信州大学附属図書館蔵「石井鶴三関連資料」から発見された、新資料をここで紹介しておきたい。

石井鶴三宛中里介山書簡(仮番号「高1—23b」)

二伸

それはそれと致しまして、小生から別に
お願ひがあるのですが、「無明の巻」と「白骨

の巻」も近々出版にとりかゝる筈ですが、
貴下の御作物のうち十枚ほどを巻頭に

掲げさせていたゞきたいのです、新聞掲
載のうちから選択させていたゞけば結構

ですが、新たに御執筆あらばそれを利用さ
せていたゞけば尚ほ有難うございます

微力の小生ですがもし、小生の力で頂戴で
きるならば家宝として備へたいとも存

じて居ります。

高尾の草庵を引はらひ、

武州御嶽山の麓へ茅屋を

結ぶ事になりました 先は

大正十四年九月十一日

夜

中里生

石井鶴三様

侍史

「二伸」とあるため、別紙書簡のつづきと推測されるが、「石井鶴三関連資料」からは、現在のところ、その別紙や封筒は発見・特定されていない。「無明の巻」と「白骨の巻」も近々出版にとりかゝる」と記されているのは、一九二五年一月に『大菩薩峠第五巻』として春秋社より刊行された単行本を指すと見られる。また、書簡中の「貴下の御作物のうち十枚ほどを巻頭に掲げさせていたゞきたい」という介山の願いどおり、単行本には、巻頭に石井鶴三の挿絵

一、二点が掲載されている。新聞連載時、「無明の巻」は石井鶴三が担当したが、「白骨の巻」は金森観陽が担当していた。それでも、単行本化の際には、鶴三の挿絵のみが掲載されている。そのことから、介山の鶴三への「敬意」の強さがうかがえる。さらに、単行本には「挿畫目次」まで附されており、また作者の「緒言」として「巻頭を飾る石井鶴三氏の絵は、特に請うて其の素描の下絵を掲ぐるを得たのは、一層珍とすべきもので、厚く感謝の意を表する處也」と記されている。こうした介山による鶴三の扱いは、書簡中にある「微力の小生ですがもし、小生の力で頂戴できるならば家宝として備へたいとも存じて居ります」といった思いを強く反映しているといえるだろう。

*12 大衆文学研究会編「年譜」(『中里介山全集第二〇巻』一九七二・七、筑摩書房)、尾崎秀樹監修・大衆文学研究会編「中里介山年譜」(『国文学 解釈と鑑賞・別冊』一九九四・一)、紅野謙介「中里介山『大菩薩峠』とその演劇化をめぐって」(前出) 参照。

*13 「大菩薩峠」再連載開始の約半年前、一九二四年七月二〇日から『報知新聞』紙上に連載されたこの小説は、大きな評判となり、一九二七年七月二日まで、実に三年にわたり、一〇〇〇回を突破する連載が続けられていった。

*14 さらに、「大菩薩峠」が連載された『大阪毎日新聞』紙上でも、「本紙夕刊紙上に連載中の中里介山氏の『大菩薩峠』と相並んで、軽文学界の双璧ともいふべき白井喬二氏の『新撰組』後篇は、愈々佳境に入りました」という形で、『サンデー毎日』の広告が掲載されている(一九二五・三・四)。

*15 尾崎秀樹「大衆文学通史・時代小説」(『大衆文学大系別巻』一九八〇・四、講談社) 参照。

*16 「大衆文学の歴史」(前出)。

*17 『現代大衆文学全集 第一巻』(一九二七・五、平凡社)。「新撰組」のほかに、「恋のはやり唄」、「乳人重の井」、「雨乞ひ小町」も収録されている。

*18 『さらば富士に立つ影』(前出) 参照。

*19 なお、中里介山は、別の形で『円本ブーム』に加わっている。それは、『現代

大衆文学全集』刊行開始の半年後、一九二七年一月から一冊一円で刊行された、春秋社の普及版『大菩薩峠』全一〇冊である。このように『円本ブーム』においても、介山は、白井喬二を結果的に追隨する形になっている。

*20 「小説と挿絵」(『近代日本の美術と文学』一九七九・一一、木耳社)。

*21 ただし、石井鶴三が中里介山の小説に挿絵を寄せたのは「大菩薩峠」がはじめてではなく、「小野の小町」(『婦人之友』一九三二・一〇二二)、「義朝の子」(『婦人之友』一九三三・一〇三、五、七、九)であった。当時の両者の関係については、松本和也「大正末における石井鶴三と中里介山の関わり——雑誌『婦人之友』と『小野の小町』挿絵をめぐって」(『信州大学附属図書館研究』二〇一三・一)に詳しい。

*22 「新聞小説と挿絵のインターフフェイス——一九二〇年代の転換をめぐって」(『岩波講座文学2 メディアの力学』二〇〇二・一二、岩波書店)。

*23 なお、この企画が実現した裏側に、春陽会の先輩の石井鶴三による刺戟があったことは、匠秀夫が指摘している通りである(『小説と挿絵』前出)。

*24 『さらば富士に立つ影』(前出) 参照。

*25 なお、石井鶴三は後に、白井喬二の小説の挿絵も担当している。そのやりとりの一端を示すものとして、信州大学附属図書館蔵「石井鶴三関連資料」から発見された、新資料をここで紹介しておきたい。

本位田準一宛石井鶴三書簡(仮番号「書1—266」)

御手紙拝見「江戸市民の夢」

今月休載の事となりました由

承知致しました

文芸倶楽部九月号ありが

たく存じます カットがまに

あはなくなりすみませんでした

こんどはまちがひなきやうに
致します

不順の候 御大切に願ひます
とりあへず御返事まで

八月二十日

石井鶴三

本位田準一様

宛先は、「小石川区戸崎町四二八／博文館編輯部／本位田準一様」。ただし消印はなく、未発信の書簡だと推察される。裏面には、「板橋町中丸／石井鶴三」と記されている。

本位田準一は博文館の編集者であり、当時、『文藝倶楽部』を担当していた。書簡にも記されている白井喬二「江戸市民の夢」は、『文藝倶楽部』一九二八年二月号から二月号まで連載され、石井鶴三が挿絵を担当した。ただし、九月号小説末尾に「以下次号」とあるにもかかわらず、一〇月号に同作は掲載されていない。ここから、一〇月号は休載され、本書簡で鶴三がそれを了解した旨、本位田宛で記されていることが分かる。よって、本書簡は、消印はないものの、一九二八年八月二〇日に書かれたものだと推察される。

*26 「大衆作寸言」(前出)。

*27 同論は、『中央公論』ではじめて「大衆」(「大衆文芸」)が集中的に取り上げられたことで有名な、特集「大衆文芸研究」「大衆文芸論」に掲載された評論であった。

*28 セシル・サカイ「大衆文学の歴史」(前出)。

*29 中谷博「白井喬二氏の態度を論ず——盤嶽物の意義に就て」(『大衆文藝』一九四一・一一)。

*30 「白井喬二年譜」(『さらば富士に立つ影』前出) 参照。

*31 一九二五年を中心とした「大衆文学」の〈ジャンル形成〉と戦時下の動向は、

「文学」外の様々な要素からも深いつながりが見出される。一例を挙げれば、一九二五年には「普通選挙法」が成立・「治安維持法」が公布されるなど、いわゆる「大衆」の「国民」化が進められ、戦時体制の基盤が築かれていった(有山輝雄「総動員体制とメディア」『メディア史を学ぶ人のために』二〇〇四・一一、世界思想社)。「普通選挙法」成立に、中里介山が強い関心を寄せていたことは、広く知られているとおりである。

*32 もちろん、「二十一日会」内でも、様々な立場の相違があり、そこにも強い注目が必要であろう。

*本文の傍点は、注記の無い限り引用者による。また、原則として旧字は新字になおし、ルビは省略した。なお、本稿で紹介した石井鶴三関連書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・高野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏(書簡翻字文責・平浩二)の大きなお力添えを頂いた。心から感謝の意を表したい。